

平城宮式軒瓦の同範関係の調査

平城宮跡発掘調査部

考古第三調査室では、平城宮および平城京城で出土する軒瓦の同範関係について継続的に調査を実施しているが、そうした近年の調査成果のいくつかを報告する。

壱岐島分寺の軒丸瓦6284A

平城宮軒瓦編年第Ⅰ期の軒丸瓦である6284Aは、ほかの6284型式と同じく、第一次大極殿地域に多く分布している。1987年度から開始された壱岐島分寺の発掘調査で、これと同範とみられる軒丸瓦が出土したため、長崎県教育委員会において実物による照合を行った。その結果、細部にわたる文様配列とともに範傷が一致し、同範であることが確定した。壱岐島分寺例は、平城宮出土のものに比べて範傷が進行しており、時期的に遅れることは間違いない。また、胎土や焼成が明らかに異なるうえに、前者は接合式でありながら、瓦当裏面下半部に周堤状の高まりをもつという特徴を備える。こうした特徴は、九州の7~8世紀の軒丸瓦のいくつかで認められており、平城宮とは異なる工人が製作したことを見出している。よって範が移動したことは確実であるが、その年代を含めて、壱岐島分寺ないしその前身寺院（『延喜式』卷21玄蕃寮に「壱岐島直の氏寺を島分寺となす」とみえる）の造営と中央官衙との関わりを検討する上で重要な資料として注目される。本例は、現在までに判明した平城宮同範軒瓦としては、最も遠隔地のものである。なお、この成果を含む壱岐島分寺の発掘調査報告（長崎県芦辺町教育委員会『壱岐島分寺Ⅰ』1991年）が刊行されている。（小沢 裕）

壱岐島分寺 6284A (1:4)

大和興福寺の軒平瓦6682E

本軒平瓦は1986年の第174-7次で興福寺旧境内から出土した。今まで平城宮京を通じ唯一の発見例である。瓦当文様と曲線顎の特徴から平城宮軒瓦編年第Ⅱ期後半（天平初年~17年）の作と考えられる。文様左第一単位第二支葉の内弯部の不自然な突出箇所から、下野薬師寺と播磨溝口廃寺出土の軒平瓦と同範である可能性が出てきた（岡本東三「同範軒平瓦について」『考古学雑誌』第60巻第1号 1974年）。1988年京都国立博物館主催の特別展覧会「畿内と東国」開催期間中、興福寺例と下野薬師寺例との同範関係を確認した。岡本氏は範傷進行によって下野薬師寺から播磨溝口廃寺への範型の移動を指摘した。興福寺例は破片のため範傷進行による比較ができないが、顎の形状が曲線顎であるのは播磨溝口廃寺に近い。これに対して下野薬師寺例は浅い段顎に仕上げている。出土堆の付近では「ならシルクロード博覧会」に伴う発掘調査

下野薬師寺
6682E

播磨溝口廃寺
6682E

大和興福寺
6682E
(1:4)

が奈良県立橿原考古学研究所によって実施されており、今後残存状況の良好な6682Eが発見されれば、範型の移動について解答を与えることができよう。

(佐川正敏)

平城宮の軒丸瓦6284E と 6282Fa

両者は弁を線的に表現した複弁8弁蓮華文で、間弁がB系統、平坦な中房の蓮子数が1+6、外区内縁の珠文数が24、外区外縁の線鋸歯数が24、外縁の形態が傾斜縁Ⅱであるというように、中房中心蓮子の大きさの違いを除けば、諸特徴は一致する。さらに両者の文様細部の位置関係も一致するので、6284Faは6284Eの中房中心蓮子を大きく彫り直したものと考えられる。ところで6284Eは平城宮軒瓦編年第Ⅰ期（和銅元年～養老5年）に、6282Faは第Ⅱ期後半から第Ⅲ期にかけて（天平初年～天平宝字元年）それぞれ位置づけられている。6282Faはさらに弁を彫り直してFbとなり、天平宝字年間の平城宮の改作への使用が考えられている（『平城宮発掘調査報告 XIII』P.337 1991年）。つまり6284E-6282Fの範型は平城宮造営以来約半世紀に渡って使用し続けられたことになる。目下知られる奈良時代で最も息の長い範型といえよう。

(佐川正敏)

~284E

6282Fa

両者の比較